Title	瀬在 良男 著 『行動論的価値論の研究』
Sub Title	Yoshio Sezai, Behavioral Value Theory
Author	霜野, 寿亮(Shimono, Toshiaki)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1976
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.49, No.4 (1976. 4) ,p.107- 111
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19760415-0107

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

瀬在良男著

『行動論的価値論の研究』

一 普段の生活において、人は何物かの実現を意識的に企図したり、あるいは何物かに引きずられたりして行動している。我々は普通この何物かを目標・目的・理念、時には理想郷などと呼んでいる。これらの言葉で示される行動対象は、当事者にとつて好ましいもの、望ましいもの、そして価値あるものにはかならない。いま、行動対象と行為者自身の双方に係わる用語として「価値」を選べば、社会行動の規定因として価値が重要な働きをすることは今さら指摘するまでもない事柄である。特に政治的行動の場合には、価値が主要な役割を演じている。このように価値が人々の社会行動と密接な係わりを持つにもかかわらず、科学の世界では、マックス・ウェーバーによる価値判断排除の提唱以来、価値に関する考察は一種の聖域とみなされているようである。そして、今日においても、価値に係わる議論をするには勇気がいると、大方の研究者には思われているようにみえる。確かに、科学それ自体が何についてであれ価値判

断を下すべきではなく、また価値判断のなしえないことは、科学的思考にとつての大前提である。しかしながら、科学の世界からの価値判断の排除という考え方にしても、価値に関する経験的考察をも排除するものではない。これまでは、この点と価値の経験的考察のすこぶる困難であることが表裏一体のものとして理解されることが多く、足踏み状態が続いていたのである。

それでも最近になると、経験的考察の可能な範囲で価値の科学的解明をめざそうとする積極的な姿勢が研究者の間にあらわれてきている。一口に価値の経験的考察といつても、それに対する研究者の対応の仕方は様々である。価値を真正面にみずえ、価値とは何ぞやと哲学的にあるいは経験的に切りこむ研究者もいるであろう。価値そのものを研究対象として選び、その解明に心をくだく研究者のいる一方で、それぞれの個別の研究分野の背景として価値をめぐる議論に関心を有する研究者もいる。背景としての価値論に投射される思いは、一方で科学性至上主義が科学を無能にしたとみる科学への絶望感から価値の復興をもくろむ立場であり、他方で価値の経験的究明こそが無能と言われる科学に現実への対応能力を付与させることとなり、科学を再起させる道につながると信ずる立場である。筆者の考えは後者に近いが、どのような思いを寄せるにせよ、社会行動の規定因としての価値の科学的解明がなされなければならない時期にきていると言える。このようなことを考えている筆者の目についたのが、『行動論的価値論の研究』と題する本書である。

二 本書は三部八章から構成されている。簡単に内容をみてゆこう。著者はまえがきで、本書が「価値論と記号論の關係理論の主題確立のための一環的研究としてまとめられたもの」であり、「価値論を行動理論の枠組のなかで捉える」ことがその基本的意図であると述べている。まず第一章では、価値研究の様々なアプローチを概説したあと、それらを、(1)記述的価値論——価値心理主義、自然主義的価値論、(J・デューイの) 価値の実用主義的探究、(2)規範的価値論——新カント学派の価値哲学、(M・シェラーの) 価値の現象学的探究、(N・ハルトマンの) 価値の存在論的探究、(3)分析的価値論——価値の情緒的探究、価値の言語分析的探究、に整理する。

そして、記述的価値論についてはその特色が「価値判断(評価)の機能的分析を……経験的事実との相關関係から意図する価値探究の体系であつて……とくに価値論と行動論との關係理論の主題確立を意図するところにある」(四二頁)とみて注視している。

著者は第二章で価値論を次のような全体的見取図のなかに位置づける。すなわち、方法論的視点としては価値論を、まず(1)行動の選好体系の理論(theory of the preferential system of action)としてみるることができるとする。ここでは、「価値探究の前提的方法として価値現象の心理、生物学的分析が重要な意味をもつており、人間行動をとくに心理、生物的過程に還元しようとする還元主義的傾向がきわだつて顯著である」(四九頁)として、E・C・トールマンに言及し、「有機体としての人間の目的行動を方向づけ、誘導する価値意識の『動機づけ』機能の説明」(五二頁)が分析の主要問題であると

している。また、同様の意味でデューイの「評価」(valuation)についても触れている。次いで、(2)価値論を行動の社会体系の理論(theory of the social system of action)として捉え、この試みが「その価値理論の展開にあつて、社会的行為の基本的単位として『役割』(role)の概念を挿入し、そこに社会化過程における『価値—態度』の機能連関説の立場を鮮明に印象づけようとするミードの社会的相互行為理論のうち、その先鞭づけを見出すことができる」(六三頁)としている。続けて、(3)行動論的価値論は「人生の生き方に対する評価と決断のための実践的課題をも担うもの」(六三頁)でなければならず、「科学的対象としてのみ規定される価値それ自体を取扱うことでは決してな「く」、それは理念としての価値を、経験的に記述と分析の可能な価値の從属関係においても正当化することによつて、あくまでも科学のための価値として意味づける、ということである」(六八頁)と強調している。さらに、(4)行動論的価値論は人文社会科学にまたがる学際研究としての意味も有しており、「価値の行動論的探究の試みは、その基盤理論である行動理論の開拓と……『行動科学』(behavioral sciences)の発展をまづけてはじめて可能にされるものでなければならない」(七〇頁)と述べている。そして、「行動分析をめぐるその方法論的共通性は機能主義的方法の採用にある」(八三頁)と判断し、「個別社会科学(とくに経済学、心理学、社会学)と行動科学における機能主義的行為理論の理的展開」(八三頁)を行動論的価値論は重視しなければならないと述べている。

本論の展開される第二部の最初の章である第三章で、価値を行動論的に探究する具体的方法が示される。ここでの根本問題は「人間行動とその基本的評価傾向」の問題であり、「(a)個人行動とその評価傾向との相関性の分析、(b)社会集団行動とその評価傾向との相関性の分析」(以上九二頁)から始められるべきであるとする。前者においては、評価行動を動機づけける機能が欲求にあるとみることから、評価主体の情動的・心理的欲求の機能分析、すなわち欲求傾向 (Need-disposition) の機能分析が主題となる。後者においては、地位・位置・役割・役割期待などの概念が重視されなければならない。「評価主体の社会化過程としての『態度』の機能分析をもつてはじまり […] 社会体系における『行為の方向づけ』(Orientation of action) の機能分析が」(一〇二頁) 主題となるとする。

第四章では、人間行動の所産がパーソナリティ体系・社会体系・文化体系という三重の複合体として捉えられることをT・パーソンズに従って指摘し、それぞれの体系における分析単位が明らかにされてゆく。パーソナリティ体系においては、分析単位として自我に注目され、自我が生物学的要因に根ざしながらも社会的に形成されるものであることを、ミードの自我と役割の相互作用図式、パーソンズの欲求傾向の考え方を援用して明らかにしている。社会体系における分析単位は役割にはかならず、役割演技・役割期待・役割の相補性といったことから、役割が規範性を有することを指摘すると共に、役割を解明する際に態度研究が重要であることを述べている。文化体系の分析単位として指定されるのは当然に価値である。

社会行動を規定しながらそれに規定される文化は、「その論理的構成の過程において、特定の文化パターンもしくは規範を指示し、形成するというダイナミックなメカニズムを内含することによって、人間行動を評価行動 (evaluative behavior) たりしめるところに特色がある。それゆえ、文化の本質は『評価』(evaluation) と、そのモデルとなる『価値』(value) の内面化という点にある」(一二六頁) と述べている。そして最後に、パーソナリティ体系と社会体系が相互制約的な関係において捉えられるのは、この両体系が文化の最も中核的な要素である価値志向の基準の体系によつて統合されていることによるものであるとしている。

第五章では「行動論的価値論への方法論的定位」への展望が「評価」を手がかりに論じられる。価値は目的(客体的価値)であると同時に、「機能的に『評価』という目的に対する手段の正当化のための行動現象をとまなうのがつね」(一三三頁)であり、それは、「特定の目的対象もしくはそれに内在されている価値状況によつて誘発される受動的、情動的な反応形態としての価値経験……: 価値意識を基礎にしている」のである。そしてこの価値意識(主体的価値)は、「欲求」(need) といったような心理的動因によつて動機づけ(以上一三九頁)られながら、「価値の対象に対する価値志向的な具体的、顕在的行為の準備機能をいとなむ」とされる。そして、この「価値志向的な行為の準備機能を『態度』(attitude) として捉えることができる」(以上一四〇頁) がゆえに、「態度の構成をめぐる行為の動機づけ現象」(一四三頁) を問題にしてゆくのである。行為を内面的

に駆りたてる動機づけ志向は、その機能という点からながめれば「態度構成の情動的、動機的側面と信念の認知的側面との複合的機能からなる基底的心理過程と、その具現化になるより高次の心理過程にお「け」る目的志向のため「の」政策志向性の機能との統合からなるものである」(二四四頁)とみている。この政策志向性の機能を特色づけるのはパーソンズの言う評価的機能であるとし、価値志向の評価的様式について説明したあと、この評価的機能は行為を外面的に規制する価値志向と結びつき、基本的に価値選択行為を伴なうとしている。さて、このような機能を営む動機づけ志向の構造に目を転ずると、それはパーソナリティ体系に密着しており、パーソナリティ体系の中核的要因であり、「欲求傾向と規範意識とから成り立つ二重構造」(二四八頁)を示す価値意識に根ざしているとみている。そして、この二重構造を機能的にながめ直して、当然の帰結として、適応の問題を論じ、裁定について論じ、規範への同調を論じている。続けて、評価行動にともなわれる行為の価値志向の機能が社会的な価値意識あるいは規範意識と相関的であるとされることから、行為体系の社会化について論じられている。ここでは、志向の対象としての価値と志向の要因としての価値が「相互に対立するものではなく、むしろそれぞれ独立したカテゴリーとして、行為体系の枠組のなかに位置づけられるべきものである」(二五九頁)こと、および、文化の本質が「パーソナリティ体系における価値の内面化と社会体系における価値の制度化という点にある」(二五六頁)ことが強調されている。以上のように論を進めてきたあとで、著者

は、欲求傾向と規範意識の相互作用の研究としてまとめられる行動論的価値論的方法論的定位として、「目的(目標)の評価(信念もしくは観念の体系)と、手段の判断もしくは正当化(行為の体系)の関係の分析」と「価値(行為の目標もしくは原理)と規範(行為の基準もしくは範型)の関係の分析」(以上二六三頁)をあげている。

第六章では前章で明らかにされた方法論的定位を、行為体系としての歴史にまで拡大しようとする試みがなされている。まず、歴史分析の方法として、K・R・ポパーの因果法則的説明やC・G・ヘンベルの演繹—法則的説明は、歴史現象への適用においては「行為者(個人)の状況評価にもとづく内潜的意識過程への析出に対する配慮に欠ける一面をもつている」(二八九頁)としてこれを退け、また特定の状況のもとにいとなまれる行為をその状況とのかかわりによる理由づけから説明してゆくW・H・ドレイの合理的説明も「一定の状況制約下におけるより動態的、より機能的行為の側面つまり目的志向的な行為の機能分析に対する配慮の欠如」(二九〇頁)がみられるとする。著者が提示するのは状況的アプローチというものであり、それは「行為者の状況評価(状況解釈)の本質と、その結果としての行為者の行為の本質を析出することによつて、そこに両者の因果関係を明らかにするという歴史分析」(二九五頁)であり、欲求傾向と規範意識の機能分析に基く検証の理論をめざすとしている。そして、こうすることが「歴史分析に対する行動論的アプローチの方法論的特性を原理づける基本的問題である」(二〇七頁)としている。

第三部は結論で第七章から始まり、これまでの論旨を簡潔にまとめると共に、「行動論的価値論の基本的視点（が）、人間行動の分析に對する目的論的論理と機能主義的分析の論理の適用という点にある」（二二五頁）ことを強調している。最後の第八章では行動論的価値論の応用として、明治知識人の価値意識を欲求傾向と規範意識の複合あるいは相克として捉え解明する作業がなされている。

三 以上が本書の大まかな内容の紹介であるが、ここでの議論の展開をみると、本書の特色は価値現象を行為主体の評価行動との関係で捉える点にあると思われる。これは価値を経験的に観察するための一歩であり、価値を意識の次元におろす準備だといえよう。つまり、評価行動の根底にあるのは、評価行動に影響される側面はあつたものの評価行動を規定するところの価値意識であること、価値意識の構成要因として、行為者の欲求傾向と規範意識を重視するのである。こうしたアプローチの仕方は、これまでの広い意味における社会学的機能主義の発展のうえに立つものであり、格別の新しい視野を提供するものではないが、その理論的成果を十二分に踏まえ展開をはかつた本書は読みごたえのある労作と言えるであらう。そして、本書は価値研究が今日おかれてゐる研究状況を明確に指摘し、かつひとつの方向を示唆したものとしてこれからの展望を試みるうえにおいて注目に値するすぐれた研究であると思われる。それに加え、本書を読みながら気がつくことに、これまでの研究成果への言及やそこからの引用が実に豊富であり、種々と教えらるる点の多いことである。この点は価値研究を志さず者にとつて非常に役に立つであらう。

う。

一方で価値が行為の対象として、社会規範が行為主体から独立した存在として、行為主体の外側に位置づけられるものでありながら、他方で行為者に内面化されたあるいは社会に制度化された価値意識として把握されることから、こうした意識を規制する諸要因、具体的には欲求傾向と規範意識を規制する諸要因を分析することによつて、価値そのものの解明にせまらうとする考え方は鋭い着想であると思う。著者自身、かかる視角から歴史状況への行動論的価値論への応用を試みているのであるが、それが十分に成功しているとはいいがたい。まだ残された課題としては、価値変動の問題をどのように理論化してゆくかであらう。そのためにこそ経験的価値論の研究の充実される必要があるわけなのだが、具体的に問えば、欲求傾向はもとより社会的価値意識ないしは規範意識の生成過程をより克明に解明する作業が是非とも必要であると考ええる。そうでなければ価値現象の動態的分析というにはほど遠いであらう。価値現象の経験的考察は、こうした作業をまつて初めて完成すると言えるのはなからうか。（駿河台出版社、A五版二六八頁、一九七三年）

霜野 寿亮